

高温に伴う農作物等の管理対策

令和3年5月12日
新潟県農林水産部

新潟地方気象台が5月10日に「高温に関する早期天候情報（北陸地方）」を発表し、14日頃からかなりの高温になる可能性があるとして予想しています。

また、12日5時発表の週間天気予報では、16日の最高気温が28℃に達する可能性があるとして予想しています。ついては、下記の管理対策を参考として、高温に伴う農作物等の管理に十分留意するとともに、ハウス内等での農作業中の熱中症にも注意してください。

1 水稲

- (1) 育苗中の場合、ハウスビニールを十分開放して温度の上昇を防ぐとともに、蒸散による葉の萎凋や苗の徒長を防止するため、適正な水管理を徹底する。
- (2) 田植えに際しては、蒸散による葉の萎凋が生じないように、ハウスからの苗搬出前に十分かん水する。また、水田への搬出後も葉が萎凋しないよう注意し、必要に応じかん水する。
- (3) 除草剤の使用基準を確認し、高温時に薬害が発生しやすい表示のある除草剤は高温条件での使用を控える。また、雑草の生育は高温で促進されるため、雑草の生育状況を確認し、除草剤の散布適期を逃さないようにする。
- (4) ワキの発生が多い場合は夜間落水等を行い、土壌への酸素供給などにより根の健全化に努める。

2 大麦

- (1) 高温前後の土壌の乾湿の急変による枯れ熟れを軽減するため、排水溝の再点検を行い、最適な土壌水分の維持に努める。
- (2) 登熟日数が短縮し、成熟期が早まることが予想されるため、出穂後の積算気温からの成熟期予想（積算気温 650～700℃）を参考に収穫計画をたて（「麦類栽培の手引き」平 29、県農林水産部）、収穫作業が適期に実施されるよう施設・機械の準備を行う。

3 園芸全般

- (1) 病害虫発生予察情報に留意し、生育ステージに応じた適切な病害虫防除に努める。
なお、高温時の薬剤散布は、薬害の恐れがあるので避ける。
- (2) 気温の上昇に伴い、施設ではコナジラミ類、アザミウマ類、ハダニ類などが増加する恐れがあり、また、露地でもアブラムシ類などの害虫が発生する恐れがあるので、発生状況に応じて適期に防除する。

4 野菜

(1) 施設野菜（トマト、きゅうり、いちごなど）

ア 育苗中の苗類は、25℃を目安に換気を行い、育苗ハウス内の温度を下げる。しおれが見られる場合は、寒冷紗等でハウス全体を遮光する。

イ きゅうりは、急激な温度変化を避けるため、細かにハウスの換気等を行う。特に、急激な高温・多湿による草勢の低下や、その後の急激な換気による葉焼けには十分注意する。

ウ トマトは、着果負担が生じているほ場では、ガク枯れや葉先枯れが発生し、その枯れた部分から灰色かび病や葉かび病などの病害が発生しやすくなるため、換気による適切な温度・湿度管理を徹底する。また、必要に応じ内張カーテンによる遮光等を行う。

病害が発生した場合は、葉かきや花びら取り及び罹病葉の除去を行った後に防除を行う。

エ いちごは、ハウス内温度を下げるため換気を強めるとともに、吸水量の増加に対応するため、葉がしおれないよう1回のかん水時間を短くし、回数を多くする。

高温下では果実の品質低下が著しいので、収穫適期を遵守するとともに収穫後の取り扱いを丁寧に行い、果実の損傷を防止する。

オ ハウスすいかでは、日中30℃・夜間15℃を目安に換気量を調整する。日中に葉のしおれが生じないように、晴天時には朝にチューブでかん水を行う。また高温・多湿時の急激な換気による葉焼け及び脱水には注意する。

(2) 露地野菜

ア 定植期のほ場では、高温乾燥により葉焼けや活着遅れが懸念されるため、適宜かん水する。なお、かん水設備がない場合は、定植時に植え穴かん水を行う。

イ 育苗中のえだまめでは、は種直後の高温防止のため遮光資材等を利用して発芽不良に十分注意する。

本畑定植後のえだまめでは、マルチ内部の土壌水分量を確認し、必要に応じマルチ穴かん水する。

ウ すいかのトンネル早熟作型及び密閉トンネル作型では、高温による葉焼けに十分注意する。

① 晴れて気温が高くなることが予想される場合は、朝にチューブでかん水を行う。

② 密閉トンネルでは、換気穴を増やす。

③ トンネル整枝栽培の場合は、通常より換気量を多くする。

エ ねぎチェーンポット育苗で、定植ほ場の土壌水分が少ない場合は、定植日に定植溝を作り、土壌の乾燥を少なくするよう努める。

オ アスパラガスでは、土壌の乾燥による萌芽の抑制や品質の低下を招くため、生育が停滞しないよう必要により、うね間かん水を行う。

立茎長期取り栽培で、前年秋に早期枯れ上がりしたところでは、天候が安定しているうちに早期に立茎を行う。

カ さといもの定植後マルチ被覆栽培では、ほ場を見回り、出芽したらマルチ部分を切り開く。なお、切り開きが遅れると高温障害を受けるので注意する。

キ そらまめは莢肥大期のため、ほ場が乾燥しているようであれば通路かん水を行う。

5 果樹

- (1) 日本なしをはじめとして、すでに3～10日生育が早まっており、今後の高温でさらに早まる可能性がある。花穂の整形（ぶどう）、摘らい（かき）等の作業が適期になされるよう、準備を計画的に進める。
- (2) ぶどう、日本なし、いちじくなどの施設栽培は、ハウス内の高温による生育障害を受けやすいので、換気による適切な温度・湿度管理に努める。
特に、開花期直前の無加温ぶどうは、短時間の高温でも結実不良（花振るい）となりやすいので、温度・湿度管理に十分注意する。
- (3) 4月の霜害や強風害、あられ被害などを受けた園地では被害状況に合わせた新梢管理や着果管理を行う。

6 花き

- (1) 球根養成は、土壌が極端に乾燥しないように適宜かん水する。特に砂丘畑など乾燥するほ場では、スプリンクラーで定期的にかん水する。
- (2) 切花及び鉢物などの施設栽培は、高温や強日射により葉焼け等の生育障害が生じやすいので、遮光資材の活用や換気等による適切な温度・湿度管理を実施する。また、土壌が乾燥しないよう土壌水分に注意し、適切にかん水を行う。

7 畜産

- (1) 天気予報に注意し、急な気温上昇に伴う家畜疾病を予防するため、換気・送風・寒冷紗・屋根への塗装等の暑熱対策を早めに準備する。
特に、換気扇、送風機は支障なく稼動するよう、ほこりを落とし、ベルトの張り、注油などの点検、電気系統の具合もチェックする（掃除をすることによって、風量も含めて効率がアップする）。
- (2) 開放畜舎では、通風をよくするために開口部はできるだけ開放し、空気の流れを妨げるものを除去する。
- (3) 搾乳牛は畜舎内の温度が20℃を超えたら暑熱対策を実施し、家畜の体感温度の低下に努める。
- (4) 家畜の観察を励行するとともに、餌槽や飲水設備をこまめに清掃・点検し、新鮮な飼料・飲水が確保されるように努める。
- (5) 良質な飼料給与により食欲低下を防止する。
- (6) 高温時のミネラル、ビタミン及び重曹の給与は効果があるので、家畜への慣らし給与を始める。

8 きのこ

- (1) ハウス内の高温による生育障害を防ぐため、換気による適切な温度・湿度管理に努める。

- (2) 換気をする場合は、害菌・害虫の進入防止対策に努める。
- (3) 害菌の早期発見に努め、汚染された菌床は速やかに撤去する。
- (4) 高温下では、きのこの品質低下が著しいので、適期収穫に努める。
- (5) 収穫したきのこは、速やかに保冷库等で保管する。
- (6) 仮伏せ中のほだ木をシート等で被覆している場合は、通風、日除け、散水などで温度管理に努める。
- (7) その他、極端な温度変化による影響の早期発見に努め、適切に対応するよう留意する。